2011年度　大学生の力を活用した集落活性化事業報告書

福大Cプロジェクト（福島大学）

メンバー

阿部智明（地域政策科学研究科修士課程2年）

遠藤章弘（地域政策科学研究科修士課程2年）

◎木村義彦（地域政策科学研究科修士課程2年）

今野成美（行政政策学類4年）

武田悠（行政政策学類4年）

野田祥子（行政政策学類4年）

※◎は代表を指す。

調査対象地：福島県相馬郡飯舘村佐須地区

写真（安穏朝市での佐須虎捕太鼓披露の様子　2011/11/20）

章立て

1. はじめに

2. 飯舘村・佐須地区の被災状況
2.1. 飯舘村の地域特性
2.2. 佐須地区の地域性
2.3. 伝統芸能と自然を活かした地域づくり
2.4. 飯舘村の被害と放射能汚染
2.5.飯舘村の計画的避難状況

3. Cプロジェクトの活動
3.1. 概要（方向性・時系列）
3.2. 佐須地区アンテナショップの出店（学内広場にて）（2011/5/6）
3.3. 避難状況聞き取り調査・活動計画検討
(1) 避難状況聞き取り調査（2011/6～2011/10）
(2) 佐須地区の課題
(3) 佐須地区の取り組みの支援活動
① 佐須の集い（2011/10/2）
② 銀座文祥堂での飯舘村『佐須虎捕太鼓』上演　（11/19）
③ 築地本願寺での飯舘村『佐須虎捕太鼓』上演　（1/20）
④ 佐須元気集会参加（2011/1/29）
3.4. 福大祭つながりプログラム実施（2011/10/29,30）
(1) 概要
(2) アグリコーヒー販売
(3) ステージ企画（被災地へのメッセージ）
(4) 飯舘村写真展示
(5) キッズコーナー
(6) 愚痴アンケート

4. 総括
4.1. まとめ
(1) 佐須地区の活動から感じたこと
(2) 福大Ｃプロジェクトの活動
4.2. 活動を通して知ったこと・学んだこと

1章　はじめに

私たち福大Cプロジェクト（以下、Cプロ）は、農村が抱える集落活性化という喫緊の課題に対して実践的な活動をしたいという有志で立ち上げた集団である。ここでいう実践的とは、授業や専門書から学んだ地域・集落活性化という課題を集落という実際の現場で考え、地域住民との交流を通じて課題や対策を見つけ、解決に向けたとりくみに挑戦するという意味である。また、活動の方針として学生の主体性を重視し、教員の助言・協力等は得ながらも、活動に関する意思決定はできる限り学生自身で行うことを掲げた。

これらを胸に私たちの活動は 2009 年度から飯舘村佐須地区と始まった。飯舘村は村民自らが自分たちの暮らしや村を真剣に見つめ直し、自立に向けた行政区による積極的な地域づくりが展開されている。住民が生きがいと地域で暮らす誇りとを強く持っている村である。佐須地区では少子高齢化による地域衰退を課題とするなか、伝統文化地域資源を活用したグリーンツーリズム事業と、農作物加工品の新たな販売ルート確立に向け協同して様々な活動を行ってきた。なかでも「都市と農村の交流」をテーマに「まちなかマルシェ」という福島県の中産間地域の物産展に出展を試みたことは私たちＣプロにとっても佐須地区にとっても大きな前進であったと言える。

しかし2011年3月11日、午後2時46分。国内観測史上最大規模のマグニチュード（M）９．０を記録した東日本大震災は岩手、宮城、福島、茨城、千葉を中心とした太平洋沿岸地域に、死者・行方不明者数2万人を超える甚大な被害をもたらした。とりわけ地震により引き起こった東京電力福島第一原子力発電所の放射能漏れ事故は、福島県における天災復興を憚るばかりか、生まれ育った地へ帰れないかもしれないという深刻な人災問題となった。さらに皮肉なことに飯舘村は福島県内において最も放射能汚染が深刻な地域として全世界にまで知れ渡る事態になった。高濃度の放射能汚染は飯舘村民にとって大きな混乱と突然の村外避難を引き起こした。

原子力発電所事故による広範囲における放射能汚染は、「緊急避難」または「計画的避難」という意図しない人交流失と健康問題、さらには高濃度汚染による「食品汚染」「土壌汚染」と「風評被害」という形で、長年強固に結ばれていた地域コミュニティを一瞬にして崩壊させてしまったといえる。農山村魚村地域においては、地域や家族といった小さなコミュニティが産業や伝統文化を大きく支えていることからも、コミュニティの崩壊は中山間地域のコミュニティの消滅を大きく招く要因であることは明らかである。これは少子高齢化、過疎化という課題を抱える多くの中山間地にとって、「限界集落」を遥に上回る地域存続の危機ともいえるのではないか。

飯舘村そして佐須地区においてもこの状況が続いている。除染や被害補償など数多の問題が山積し、非情里な現実に嘆き悲しむ日々を過ごす村民が多くいるなか、これまでのコミュニティや文化、また新たなコミュニティを形成しようと尽力する佐須住民がみられる。私たちＣプロは「地域コミュニティ」を 2011 年度のテーマに佐須のコミュニティ支援活動に重点を置くこととした。当初の目的・方針の下、私たちCプロは農村の集落活性化に大学生が貢献できることは何かということを考え続けてきた私たちにとって、「できることから始め」、「地域との交流」から前に進むことは、コミュニティの危機に面している今だからこそ、継続していかなければならないと考えている。

２章　調査地紹介

2.1. 飯舘村の地域特性

福島県相馬郡飯舘村は福島県浜通りと呼ばれる太平洋に面する南北に長い沿岸地方の北西、阿武隈山地北端の高原地帯に位置する。１９５６年９月３０日に旧大舘村と旧飯曽村が合併して飯舘村が誕生し、２０の行政区（草野、深谷、伊丹沢、関沢、小宮、八木沢･芦原、大倉、佐須、宮内、飯樋町、前田･八和木、大久保･外内、上飯樋、比曽、長泥、蕨平、関根･松塚、臼石、前田、二枚橋･須萱）によって成り立つ。

村の人口は６２０９人、世帯数は１７３３世帯。一世帯当たり人口は３．５８人、高齢化率は３０．０％（平成２２年度国勢調査）と大家族世帯が多い。高齢化は村大きな課題となっている。

村の総面積は２３０．１３㎢、そのうち約７５％を山林が占め、そのうち国有林５９％、私有林３５％、公有林６％となっている。(平成２２年度国勢調査)。村の地形は比較的なだらかで、北に真野川、中央に新田川と飯樋川、南部に比曽川が流れその流域に耕地が開かれ集落を形成している。阿武隈山系から湧き出す清らかな水と豊かな自然は、山百合や水芭蕉、ヤマメ、蛍など多様な動植物を育み村の貴重な資源となっている。

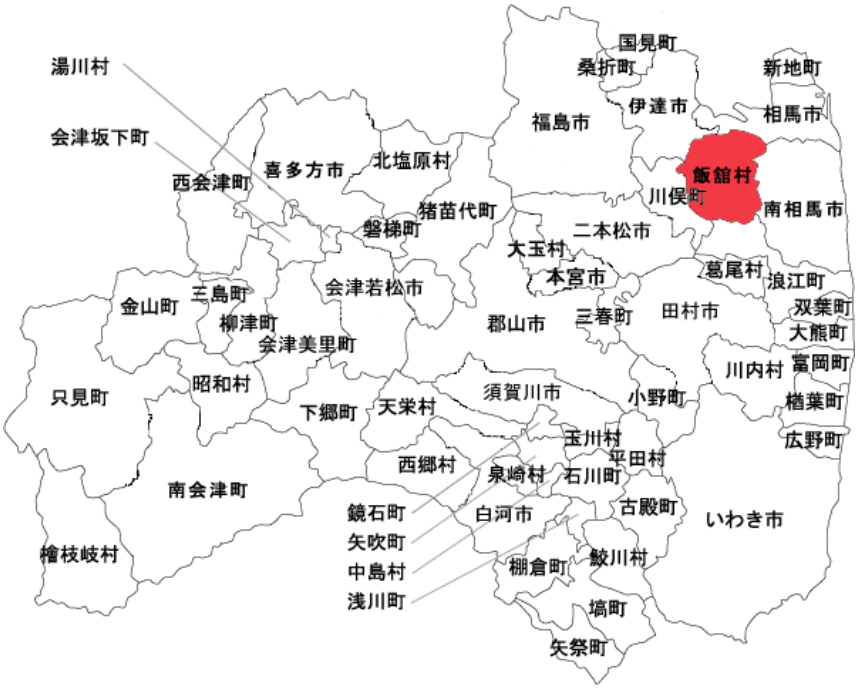

図 2-1　飯舘村の位置

村はこの大自然と共存し成り立ってきた一方で、時に冷害と極寒の冬という驚異的な自然の猛威を受けてきた。夏に吹く冷たく湿った北東風は、海上を進む間に霧を発生させ、

太平洋側の陸上に到達すると日照時間の減少や気温の低下を引き起こす「やませ」現象は、昔から村に冷害を及ぼし、水稲栽培などの農産業の壊滅的被害となったことが記録されている。１９８０年の大冷害では作況指数７％、米の出荷数０、被害金額１５億２４００万円となった。冬は氷点下２０度以下になることもあり、寒さが厳しい地域である。

近年では標高２２０～６００ｍ（平均標高４５０ｍ）の高冷地を活かしながら、トマトやインゲン、レタスなどの高原野菜や、カーネーションやトルコキキョウなどの花弁栽培など、冷害へのリスク分散と地理的要素を活かした多様な農産業を展開している。また水稲にかわる冷害に強い農業として畜産に力を入れ始める。村では飯舘村振興公社（畜産技術センター）を設立するなど「飯舘牛」といったブランド和牛を進め、東京などの都市部に向けて出荷をおこなってきた。

山々に囲まれた高原地の村へ訪れるには必ず険しい山道を登らなければならない。村内に鉄道は通っておらず、自働車かバスが唯一の移動手段となる。県庁所在地である福島市からは自動車で約５０分、相馬地方の中心都市である相馬市からは自動車で約３０分の距離と遠方とまではないが、このような地理的要因からも周囲の市町村とは疎遠、孤立になりやすい地域であったことがいえる。それゆえに阿武隈山系の豊かな自然と、孤立しやすい山間部という地理的要因から、農山村独自の伝統文化や、親族地域間のコミュニティの強い地域である。

2.2. 佐須地区の地域性

佐須地区は飯舘村の北北東に位置し、飯舘村北部を走る 115 号線に近く、真野川やふくしま百名山である虎捕山などのレジャースポットを有している。豊かな自然と山から湧き出る清水は地区の貴重な資源となっている。虎捕山麓にある山津見神社は、農漁業従事者が豊作と安全の祈願に毎年全国から約 2 万人もの参拝者が訪れている。古くから地区住民は信仰とともに、親族や地域住民と協力しながら参拝者に田畑を開墾し育てた野菜やわら細工を売りにだし、団子や蕎麦をこしらえ参道に茶屋を設けもてなしてきた。信仰とおもてなしの歴史と農村文化は今も尚受け継がれている。以前までの主要産業であったタバコ葉と養蚕を活用し、近年ではタバコ小屋や蚕小屋をどぶろく作りの酒蔵や茶屋を経営する農家もみられるなど、佐須地区は福島県において最初のどぶろく特区を取得した地域としても有名である。

飯舘村と同様に佐須地区は、過疎化、少子高齢化の進行や農業収益の低迷による農業後継者問題、さらに有害鳥獣による農作物被害など山村地域特有の問題が発生している。佐須地区の高齢化率は約３０％と村内でも高く、地区にとって大きな課題となっている。現に佐須地区の伝統芸能である「佐須獅子舞」は、高齢化と舞を引き継ぐ担い手不足によりその歴史は途絶えてしまった。過疎化、少子化の原因としては農業収益の悪化、安定と収入の多い都市への就職、進学、高学歴に向けての教育需要がある。また、村内においても中心部から離れているため、村内においても通勤、通学にも不便をきたしている。さらに

村はインターネットなどの情報通信機器の普及が遅れていることなどの条件から、雇用と教育の面から過疎化、少子化を促しかねないという懸念を持つ住民もいる。

2.3. 伝統芸能と自然を活かした地域づくり

佐須地区では、地域の豊かさを自分たちで見出し、それを地域の誇りとして宝として生きていこうと地区のコミュニティセンターで話し合いがなされてきた。地区別計画では、策定時に地域学やワークショップを取り入れ、住民自らが地域の課題と魅力を出し合い地区の目指すビジョンを作り上げた。少子高齢化など課題を抱えている佐須地区だが、伝統芸能と自然を活かし地域に活気を取り戻そうと２００９年から２０１０年とグリーン・ツーリズム事業を展開する。地区内の活気が少しずつ失われていると感じるなかで、お年寄りから子供までが楽しく明るく過ごすことを念頭に置かれた。地区の自然と文化を活かしながら地域の課題を少しでも解消するためにはじめられたものが、都市と農村の交流をテーマとした「までいな休日」であった。高齢者が多く村内においても突出した地区活動はみられない地域ではあったが、これまで住民間で課題や地域の魅力を出し合いながら作成した地区別計画を本格的に事業化し始めたばかりであった。佐須地区では虎捕り山を中心とした信仰の歴史と伝統文化、真野川の清らかな水と高原地で育まれるこだわりの農産物を活かし、住民たちの誇りとして事業計画を立てた。２００９年から翌２０１０年に開催した「までいな休日」というグリーン・ツーリズム事業はまさに佐須住民の挑戦であった。以下その取り組みを簡単に紹介する。

2.4. 飯舘村の被害と放射能汚染

国内観測史上最大規模の地震といわれるほどの地震であったが、飯舘村の被害は村道故障箇所が６１箇所、瓦屋根破損２００カ所程度ととても少なかった。地震発生当日から津波で大きな被害を受けた相馬方面からの避難者の受け入れができるほどであった。飯舘村の最大の被害は、２０１１年３月１２日に起きた東京電力原子力発電所事故による高濃度の放射能物質汚染である。

東関東大震災に起因する福島第一原子力発電所事故により、飯舘村は高濃度の放射能汚染を被った。放射能漏れ事故間もない、２０１１年３月１４日に、福島県災害対策本部により、飯舘村中央部にある施設「いちばん館」前に可搬型モニタリングポストが設置され、同日午後１時から放射線量（空間線量；毎時マイクロシーベルト〔μＳｖ/ｈ〕）の測定が開始された。この際の空間線率は、毎時０．１～０．３マイクロシーベルトだったが、翌１５日午後３時に毎時３．４マイクロシーベルトに上昇し、同日午後６時２０分には毎時４４．７マイクロシーベルトを観測した。村内の空間線量は９月９日午後１１時時点で毎時２．３４マイクロシーベルトに減少し、２０１１年１月現在では、毎時２マイクロシーベルトを前後する程度にほぼ一定している。

内閣府が７月４日から８月２０日までの間に、飯舘村の５９７箇所での１ｍ高さ及び１

ｃｍ高さでのガンマ線による空間線量率を測定し作成した汚染マップによると、村の大半が、年間２０ミリシーベルトから４０ミリシーベルト未満（毎時３．８マイクロシーベルト）の地域であることが明らかとなった。また東京電力福島第一原子力発電所から３０キロ圏内に一部あたる飯舘村南部周辺地域では、年間４０ミリシーベルト以上（毎時７．６マイクロシーベルト以上）と高い数値が計測された。

放射能の積算線量が年間２０ミリシーベルトを超えるおそれから、政府に同年４月２２日に計画的避難区域に指定された。計画的避難は福島第一原発から 20 キロ圏の警戒区域の外側だが、年間の積算放射線量が 20 ミリシーベルトを超え身体に影響を及ぼす恐れがあるという見解から、国が避難を求めている区域である。避難拒否や該当区域の立ち入り、一時帰宅をするなどしても罰則はないものの、いつ戻れるか全くわからない状態での村外避難は村民にとって極度の不安と心身疲労になっている。目には見えない得体のしれない放射能という恐怖と、他の地域とは比較できないほどの高濃度の放射能汚染は、村民にとって村での生活そのものを置いていかなければならないほどのものであった。

2.5. 飯舘村の計画的避難状況

避難においては各家庭のニーズを可能な限り反映させること、また避難後の村民の生活支援と情報提供のため、全村民に対し役場が計画的避難における意向調書を配布回収しそれを基に避難が実施された。飯舘村の計画的避難は７月末までにほぼ完了した。約３割の村民（１７７９人、７９５世帯）が仮設住宅及び公務員宿舎に集団避難し、約７割の村民（３７４５人、１８０５世帯）は県の借上げ住宅などにそれぞれ避難している状況で、１３人、８世帯の村民は避難せずに村内で生活をしている。また、約１７００世帯あった世帯数が実質２７００世帯にも増え、地域コミュニティはもちろんのこと、家族単位までがバラバラに避難している状況となっている。（２０１１年１０月１日現在)。

村は従来の生活基盤の維持を最大限に優先させるため、避難先を村の周辺市町村に確保することに尽力した。現に福島市、伊達市、保原町など飯舘村近郊に多くの住民が避難している。(表 2-1、表 2-2)

村は避難解除後の村民の生活の復興を目指しているが、長期的な放射能除去作業と風評被害が懸念される。また村は一度避難で移り住んだ住民、特に若い世代は村に戻ってこないおそれも強いと考えている。大家族世帯が多く残る農村地にとって、家族と地域コミュニティは村での暮らしを支える重要な基盤であり、これらの崩壊は村民の暮らし方そのものを大きく左右すると考えられる。

表 2-1　県内外の飯舘村避難状況

区域	避難人数（人）	避難世帯数（世帯）
県内	5,514	2,283
県外（北海道から沖縄）	530	288
外国（中国、韓国、フィリピン）	14	12
いいたてホーム	106	106
村内（未避難）	13	8
合計	6,177	2,697

表 2-2　主な避難先

区域	避難人数
福島市	3,687
伊達市	622
川俣町	491
相馬・南相馬市	645
県外	530
その他	189
合計	6,177

3 章　C プロジェクトの活動

3.1. C プロジェクト活動概要（武田悠）

東日本大震災が発生し、佐須地区における活動ができなくなったことを受け、昨年とは異なる活動の方針をとる必要が出てきた。活動計画の見通しが立たず、住民の方との密な連絡を取ることも難しいなか、私たちは地域の実情を知ることが活動の第一歩と考えた。そうして、何かしらできることをお手伝いするという方針をもって、活動を始めることとなった。私たちも実家や県外に避難していたことに加え、避難情報が少ないこと、連絡が取りにくいことなどのため、おおよそ把握するだけで10月になってしまった。そのため私たちの活動は 10 月以降から企画と実施に移ることとなる。

以下に、今年度の活動内容を表でまとめた。

表 3-1　年間の活動内容の一覧

時期	活動内容
4・5 月	計画的避難に関するボランティア活動
5 月 6 日	佐須地区アンテナショップの出店（学内広場にて）
6 月～	避難状況聞き取り・活動計画検討
10 月 2 日	佐須地区主催の集会に参加

10 月 29・30 日	福大祭にて「つながりプログラム」実施
11 月 19 日	銀座文祥堂での「佐須虎捕太鼓」上演に同行
11 月 20 日	築地本願寺での「佐須虎捕太鼓」上演に同行
12 月	「つながり年賀状」の作成
1 月 29 日	佐須元気集会に参加

3.2. 佐須地区アンテナショップの出店（学内広場にて）（遠藤章弘）

当時は福島第一原子力発電所の相次ぐ水素爆発事故により、放射線飛散国民的、あるいは世界的な問題として取り沙汰されていた。政府は 2011 年 4 月 11 日に計画的避難地域指定の発表を、同年 4 月 22 日には計画的避難地域指定が決定し、飯舘村は全村その区域に指定されたところであった。また、私たちが通う福島大学のある福島市でも放射線飛散に関する不安が募っていた。福島大学の上述した授業開始日の設定については賛否両論であったが 5 月の中旬に決まり、入学式は同月の 6 日に実施されることが決まった。

そのような混沌とした状況の中、私たち C プロジェクトについても全員で連絡を取り合う余裕はなかった。むしろ、授業開始日から大学に通うかどうかというレベルの事が、個人の意思・判断に委ねており、本プロジェクトの活動はそういった状況下で行ってきた。

そうして入学式に集まったメンバー有志は、入学式に大学の広場にて佐須地区のアンテナショップを出店した。入学式は新入生と両親をはじめその親族が大学に足を運び、在学生もサークルの勧誘等で通学する人が多い。私たちはそこで多くの人が集まる場でできることをやろうと話し合い、実行することとした。これが当時、「私たちが今佐須地区の方々にできること」であると考えた。

このアンテナショップは(1)地域の商品の販売活動、(2)昨年度行っていた飯舘村、佐須地区の PR 活動、(3)私たちが知る限りでの当時の飯舘村の現状の説明、を目的に行った。具体的には、去年の私たちの活動に協力していただいた農家レストランを営む方がつくった凍み餅の販売、佐須地区の紹介、飯舘村の方々への応援メッセージ作成の協力のお願い、佐須地区の方々への募金活動、私たちの活動の紹介を行った（写真 3-1、写真 3-2）。

写真 3-1　ブース周辺の様子（左手前：生協出店ブース・右奥：C プロ出店ブース）

写真 3-2　C プロのブース（昨年度佐須地区の方々と参加したイベント時の装飾を利用）

凍み餅の販売については、農家の方々は今年から作付けができるのか、できたとしても本当に売れるのか、生計をどのようにたてれことができるのかという問題を認識していたため、場当たりでも、私たちができることを実行したかたちとなった。去年に私たちの活動に協力していただいた農家の方々とメンバーが連絡をとり、震災前までにつくった保存食である凍み餅を販売した。農家の方から預かった 50 パックは全て完売し、売り上げ 3 万円、募金も 5094 円集まった。学生の両親が主な購入者であった。「飯舘村は今大変だものねー。一つ買っていくわ。」「飯舘村が計画的避難区域に入っちゃったのー。」「昔は（凍み餅を）食べたから懐かしいなー。」等、購入者やブースを訪れた人々の反応は様々であった。

学生には立て看板やブースの装飾、チラシの配布で飯舘村、佐須地区のこと、当時の現状を伝えようと働きかけた。また、立ち止まってくれた学生には、飯舘村の方々へのメッセージを書いてい

ただいた(写真 3-3、写真 3-4)。新入生をはじめ学生の中でも、飯舘村の現状に関心を示し、何かできることをしたいといった思いを持つ方々が多かったように感じられた。なお、売上金と募金は、その農家の方にお渡しした。

写真 3 - 3　販売の様子(1)（左側は入学生、右側は C プロメンバー）

写真 3-4　販売の様子(2)（左側：メッセージを書く学生、右側：C プロと入学生）

3.3. 避難状況の聞き取り調査・活動計画検討（木村義彦）

(1)避難状況聞き取り調査（2011/6～2011/10）

アンテナショップ出店後、佐須地区の状況をできるだけ正確に把握するため、昨年度でお世話になっていた区長を中心に、これまで連絡を取り合っていた方々に電話をかけることを始めた。しかし、電話がつながる方はごく少なく、4 月 5 月時は区長の佐藤公一氏でさえも地区の方々の居場

所や生活状況を把握できていないようであった。

6月から 10 月にかけて 10 人強の住民の方に話を聞くことが出来た。10 月末には区長の協力をいただき佐須地区の方々がどこに避難しているのか把握することができた。この間、聞き取り調査ができた数は少ないが、お会いすることができた一人ひとりに時間をかけてお話を聞くことによって、家庭や地域の課題、計画的避難の状況が露わになった。ここではすべては取り上げないが、月ごとに聞いた内容を一覧してみることとする。日が経つにつれて心境の変化と地区の課題、特にコミュニティをどうするか、どうしていきたいのかが見て取れる。

6 月 4 日：A さん B さん（夫妻）

夫は農業委員であり、妻は加工グループに属していた。農業と畜産を営んでいた。

B;村の事情もわからない人に何を言われても意味はない。気休めにもならないから帰ってほしい。

B;興味本位や偽善心なんかで話しかけないでほしい。発言や行動は最後まで責任を取らないのなら、もう…。

B;「置去りにされた村」、混乱と不信しか産まない報道と様々な訪問者、国や行政、心ある対応が何一つない。

A;放射能の数値ばかりしか気にならない国とマスコミ。高いというのに 20～30 ㎞圏内の見直しの必要はないとの国の判断。村には健康アドバイザーの先生が突然やってきて、「放射能は高いけど直ちに影響がないから正しく怖がりなさい。」といって帰って行った。「このままいても大丈夫なのか」という村民の質問も「大丈夫」の一言だった。でも IAEA の測定やスピーディーの発表など、国際基準では 2 倍以上で避難が必要というのに、国では土・水など総合的に判断して大丈夫と避難を押し切っておいた。国内では誤報、国際的には危険って普通に考えてそんなことありえないでしょ。結局、日が経つごとに深刻になっている。

B;私たちがされたことってわかる？PTA を中心にした、子どもたちを抱える親を対象に専門家の説明があったの。大勢の子どもたちと親の前で、また「直ちに影響はない、大丈夫。でも念のため特に子どもたちは外出を控えて」と念押しされるように言われたの。でも翌朝のニュースでは飯舘村が計画的避難地域に指定と流れている。これまでの 30 日は一体何だったの？村で発言していた専門家は何一つ顔を出さないし、コメントもない。安全と確信していたから説明しに来たんでしょ。だったら最後まで安全だって言い続けなさいよ。危ないならさっさと逃げてたわよ。これまでの被ばくは、農地は、牛は…。

A;30 日間不安の中信じてきた村民は多かった。特に高齢の方は「すごい先生がいうならまちがいねぇし、いままでどおり暮らしてぇ」という人ばかりなんだ。皆の気持ちを踏みにじったのが、すがる思いで過ごしてきた分だけやるせない気持ちでいっぱいだ。

これまで積み重ねてきた地域や村の風土、私たちの気力や気運が失われてしまった。大地に生きる私たちが大地を奪われるということはこうゆうことなのか。

A;佐須では都市交流型事業の「までいな休日」を機に「佐須こだわり農産品グループ」を立ち上げたばかりで、首都圏を中心に農産物の販売を本格化させようと地震が起こる数日前に築地に下

見をしてきたばかりだった。まさかこんなことになろうとは。

B;私たちは「農」で生きるしか術がない。収入もない。避難して都市の暮らしもわからない。水道料金とか公益費、トイレも違う。まずい野菜を高い値段で買わないといけない。今までの暮らしにはないお金や労力ばかり。自給自足だから生活ができていたし、あらためて自分の生活が豊かだと思う。

A;村は大家族世帯が多い。都市とは家族感が違う。じいちゃんばあちゃん、息子夫婦、孫。バラバラになったら誰が面倒みるのか。都市ではお金を払えば済むのかもしれないけど。そうではない問題がいっぱいあるし、田舎だからみんなで支え見守ってきた部分が強くあるんだよ。

B;私たちが今置かれている現状、どうやって暮らしていくのか、家に帰れるのか。畑や牛は大丈夫なのか。これから村がどうなっていくのか。不安だらけだけど今を生きるのに精いっぱい。

B;誰も納得のいく話や説明をしてくれない。

A;これは明らかに「人災」だ。人災によって大地が奪われ「死の大地」となってしまった。国、東電の責務は重い。国策として原発を作る技術と事故を修復する技術が伴っていないと進めてはいけないのは当然だろう。事故防止策ですら安全神話であったのだから言葉も出ない。

A;地球は生きているのだから、自然災害は共存できるし、そのための知恵を私たち農家や漁師は受け継いできた。覚悟もある。でもこれは違う。制御できない科学は人間のエゴでしかない。

A;原発の数値じゃなくて人間が第一だろう。本当に人を思った動きや報道はないんだね。

6 月中旬:C さん 男性、農家

C;なんもしたくねぇし、考えたくもねぇ。この家も土地も資産価値はもう何もねぇ。息子たちも貰っても住みたくねぇだろうな。国でしっかりと買い取ってもらうしかもうないのかと思ってしまうときがある。「何かお手伝いしますか、助けたい」という人が多いみたいだけど、どうすればいいのかほんと教えてほしいよ。

6 月中旬:D さん 女性、農家、茶屋を経営

D;放射能が高かった3月12日からしばらく畑や屋外で作業をしていた。かなり被ばくしてしまったと思う。新年度の作付予定や茶屋の経営準備などでもち米など大量の材料を買ってしまった。借金もまだ残っている。今後どうややっていけばいいのか悩みっぱなしで眠れない。

ぼーっとして、毎日テレビを眺めているだけ。ふと手をみるときれいな手をしている。いつもなら泥や傷だらけで毎日が忙しくて楽しくて。今は毎日涙しか出てこない。

7 月:A さん

A;じいちゃんの認知症が悪化してしまった。畑仕事ができない間、家で籠ってしまったことが一番の原因だと思う。顔もどこかだらしなくなってしまった。急きょ、宮城県の丸森市に田んぼと畑を借りて何でもいいから作付を始めてみた。畑さえあればじいちゃんが自分で考えて作付できる。始めてみて少しずつ元気になってきたように思うし、自分自身も作付ができ嬉しい。

周囲では高齢者の生活習慣病が特に問題になっている。どうにかできないものか。慣れない避

難先での生活ストレス、生きがいや息抜きがないことも大きな問題となっている。

佐須の若い人が会社を辞めて専業農家になろうとしていた矢先の震災だった。その子がもう農業はやらないと決断したと聞いた。若い世代の希望や決意を摘むようなことは何としても避けたい。そんな世の中や生活をどうやれば変えられるだろうか。今は彼を地域でサポートしてやりたい。

福島県内で田畑を見かけると自分で線量を測っているが、こんなに高いところで普通に作付しているところが多い。絶対に後で問題になるし、風評被害が悪化するに間違いない。飯舘は今年度の作付を全面禁止にしたが、今後について慎重に議論しらければならない。

7 月 :E さん　農家

E;避難が一段落して、いよいよこれから村がどうしていくのか皆で考えなければならない。佐須地区だってそうだ。まず、地区の皆がどうゆう生活を送っていて何に困っていて、何を考えているのか知らないとダメだ。特に若い人たちがどう思っているのかがわからない。避難の際に家庭の中でも意見が言えないことや、言いづらい雰囲気になってしまったところも多いと噂では聞く。核家族になったから別の生き方をする決断をしているところもあるだろう。

皆の気持ちが離れる前に話し会う機会が必要だ。その上で今後個人として、地区として、村としてどうしていくべきか考えていきたい。まずは率直な皆の気持ちと、判断材料がほしい。

8 月 :F さん

F;仮設住宅と民間借り上げに避難している人たちの情報格差や支援物資の格差が広がっていることが問題となっている。仮設では様々なイベントや支援、村民同士での情報や活動が目に見えやすいが、借り上げはそうはいかない。若い人たちは子育てに仕事があって動けないし、お年寄りはインターネットや携帯を使えない。住民同士でのひがみや悪口が聞こえ始まっている。役場から発送される「広報いいたてお知らせ版」が頼りだ。行政も手が間に合っていないと聞くし、頑張っているのもわかるがどうにかならないか。

8 月 :G さん

お盆が近付いているけど村ではやらないで、避難先の仮設住宅か、娘夫婦が住む家に行くことにした。本当は村でやりたかったけど、そうすると孫たちに会えないから。ご先祖様には悪いけど、やっぱり孫たちに会いたいからね。お墓も崩れて大変だったけどお墓掃除を何日かかけてやってきたからほっとしたところ。

家は定期的に帰って片づけや手入れをしているけど家が傷んできている。猿が畑だけでなく、家の中に入っているみたいで大変な思いをしている。人が住まなくなると山里はこうなってしまうんだね。

(2) 佐須地区の課題

20の行政区がある飯舘村のなかで、最北端に位置する佐須地区は、260人（男性127人、女性133人）であり、66世帯が暮らしている地区である。計画避難によって佐須地区の世帯数は117世帯と51世帯急増した（2011年10月末から12月の間におこなった佐須行政区長の聞き取り調査に基づく。データは同年7月現在時）。これは村内において大家族で暮らしていた家庭が、通勤や通学、避難先の生活環境によって核家族化を余儀なくされたことが原因である。避難後の117人（260世帯）のうち86人（199世帯）と、約74％（約77％）が、バラバラに暮らす県借上げ世帯と自主避難者である。飯舘村全体の避難者状況とほぼ同様の状況である。飯舘村役場は職場や学校教育など村民の生活基盤の確保を最優先させるため、飯舘村周辺地域への避難場所確保に尽力した。

佐須地区では皆が避難を始める直前に区長がメーリングリストを作成したことにより、避難後の地区の人々の連絡が取りやすくなり、避難先や地区住民内での連絡（ロコミを含む）が早い段階で取れたことにより、地区の集会や2次避難における地区住民間の意見交換などの情報伝達が比較的早い段階から行うことができた。

佐須地区住民の避難先は伊達市（特に保原、梁川）に密集している。保原、梁川、霊山は佐須地区から近い位置にあり、自主避難された住民も多い。また佐須村これは2次避難希望時に連絡を取り合い近場に住めるよう希望を出す住民もいることも区長からの話で明らかとなった。

佐須地区の課題として世帯数が増え、家族がバラバラになったこと、県借り上世帯、自主避難世帯に避難情報や支援にバラつきがあること、高齢者の健康障害、生活障害（認知症、鬱病）が明らかとなった。

そのような辛い避難生活のなかで区長をはじめ地区の方々は、「皆で元気に村に帰れるように乗り越えていきたい。」とおっしゃっている。皆で集まる機会をつくりながら情報交換や楽しみをつくることで今後生きていくうえでの決断と協力体制を積み上げていくことが課題であるといえる。私たち学生ができることはそのような地区住民の思いを真直ぐに応援することに他ならないと感じた。

表 3-2　佐須地区住民避難状況　　佐須行政区長の聞き取りに基づき作成（10月末現在）

		仮設住宅・公務員宿舎	県借上	自主避難	その他
県内 105(239)					
飯舘村 1(1)					未避難1(1)
福島市 45(105)	荒井	2(4)			
	飯坂町		2(4)		渓泉壮1(1)
	飯野町	1(4)	1(3)		
	松川町	2(9)			
	吉倉	3(14)			
	渡利	3(3)	2(4)		
	泉		2(2)		
	岡部		1(1)		
	小倉寺		1(1)		
	御山		1(1)		
	桜本		1(2)		
	笹谷		3(8)		
	瀬上町		2(2)	1(1)	
	田沢		1(3)		
	永井川		1(2)		
	野田町		1(2)		
	東浜町		1(2)		
	方木田		1(4)		
	丸子		1(5)		
	南中央		1(3)		
	宮下町		2(2)		
	宮代		3(9)		
	森合		1(1)		
	八島田		1(6)		
	入院・介護				2(2)
伊達市 44(106)	国見町	7(10)			
	伏黒	5(8)	1(5)		
	保原		16(43)	3(5)	
	梁川		6(16)	1(2)	
	上保原		1(2)		
	月舘		2(6)		
	霊山		2(9)		
川俣町 5(14)			4(13)		1(1)
喜多方市 1(2)			1(2)		
田村市 1(1)				1(1)	
相馬市 5(7)		3(4)	2(3)		
南相馬市 2(2)				2(2)	
いわき市 1(1)			1(1)		
県外 12(21)					
埼玉県				3(6)	
栃木県				3(5)	
福井県				1(1)	
東京都				2(5)	
茨城県				1(1)	
北海道				1(1)	
宮城県				1(2)	
総計 117(260)		26(56)	66(167)	20(32)	5(5)

(3) 佐須地区の取り組みの支援活動

「皆で元気に村に帰れるように乗り越えていきたい。」という地区住民の声から10月に入ると地区の集会が行われるようになった。区長をはじめ有志のメンバーが集会を企画し始めるにあたって、私たちは佐須応援隊として、準備のお手伝いをすることにした。荷物の運搬や会場設営も行ったが、「お年寄りは家に籠りっぱなし、どんな話でいいから話を聞いてもらって、心が楽になることが一番いい。」と住民の方々とお話しすることが何より求められた。

佐須集会の目的は以下3つにある。①避難後の地域コミュニティの維持、②避難に伴う高齢者の生活習慣病対策機能、③再開の場、情報交流の場としての集会、である。しかしそれだけではなく、「じっとしていてはいられない。何か自分達でやらなければ自体は何も変わらない」という住民の気持ちが込められている。

集会をはじめとする地区での活動は計4回実施された。集会は10月2日の「佐須の集い」、1月29日の「佐須元気集会」の計2回で、また招待イベントとして11月29日30日に開催された、銀座文祥堂、築地本願寺での飯舘村『佐須虎捕太鼓』上演がある。以下は日付順にそれぞれの特徴と参加住民の様子を報告していく。

①佐須の集い（10月２日〈日〉）

第1回目に開催された「佐須の集い」は、飯坂温泉にあるホテル大鳥で開催された。正式な開催名は「第1回避難区域にかかる研修会IN飯坂」であるが、「佐須の集い」と住民には広く知られているのでこちらを取ることとする。特徴としては役場と共催しており、汚染区域の除染対策等に関わる説明や健康相談についてなど役場職員からの住民説明会を兼ねていることにある。また飯舘村長による避難に関わる行政施策案などの話もあり、住民にとって村の状況を把握し意見を直接伝える初の情報交換の場となった。

避難後の再開の場、憩いの場としての企画もされていた。福島一平による歌謡ショーや会食会、日帰り温泉など、再開を喜び共にこれまでの避難生活を労う場となっていた。また、震災後地区内で結婚された夫婦の祝賀会も急きょ開かれ、避難先では想像もできないほどの笑い声と温かな雰囲気が会場を包んでいた。

地区の8割以上の方が参加し、皆がこの日を待ちわびていたことがわかる。子どもたちや子育て世代の方々の参加は少なく、高齢者が中心の集会となった。子育てや仕事、避難生活の疲れから、これらの世代の参加が少ないという。小学生のお子さんと一緒に参加されたご夫婦にお話を聞くと、この集会が高齢者向けのものだと思っている世帯が多いという。避難生活状況や今後の地区や村について考慮するにあたり、次を担う立場である若い世代の意見を収集することは不可欠であり、今後の大きな課題といえる。

聞き取り調査でお世話になったBさん、Dさんにお話を聞くことが出来た。

Bさんは10月になり感情がだいぶ抑えられるようになったという。「自分たちは原発とは無縁の生活。自給自足、自分たちの手で生きていくことを誇りに生きてきたけど、それだけでは自分たちの暮らしは守れないと気付かされた。なぜ原発をしっかりと知ろうとしなかったのか、今になって思う。」。

Bさんはこの間、自分たちの生活圏だけでなく外に意識を向けること、多様な知識を習得する必

要性を強く感じていた。そして子供たちの「教育・学び」こそが今の社会に問われているとおっしゃっていた。今後自分たちが受けた怒りや嘆き、身心の健康被害を繰り返してはならない。そのような社会を次世代の子供たちに託すことが、Bさんの願いであり強い決意なのだと感じた。

Dさんは借上げ住宅での生活と村での生活との葛藤に苦しんでいた。私は「心も体も壊れそう。」と涙を流して訴えかけられた。久しく会う地域の方々と話しているときは笑顔も見られるのだが、一度離れると寂しそうな顔を隠せない。借上げ住宅には旦那さんと2人で暮らしているのだが、今でも互いにすることがなくテレビを眺めて一日が終わるという。以前みたいに農作業や茶屋の仕事をしようと使用できる加工所を探しまっわったこともしたが、なかなか条件があうものはなかったという。また避難生活が長くなるにつれて、日々に生活の中で足腰や体力の低下を感じるようになり、何かをしようという気力もなくなってきているという。「原発は人間をダメにする」そうDさんはおっしゃっていた。

②銀座文祥堂での飯舘村『佐須虎捕太鼓』上演　（１１月１９日〈土〉）

震災後集落として大きな活動となったのが、銀座文祥堂、築地本願寺での飯舘村「佐須虎捕太鼓」上演である。これは佐須地区の方々の心に深く響く催しとなった。この経緯は2010年に佐須で開催された「までいな休日」というグリーン・ツーリズム事業にある。東京から佐須に田舎体験をした参加者有志が震災後結集し、佐須地区住民を東京に招待することとなった。東京築地本願寺で朝市を主催している、安穏朝市代表の中川誼美氏が中心となって実現した。マイクロバス1台に佐須住民27名が乗り込み東京へ向かった。

写真3-5　佐須虎捕太鼓上演の経緯を語る中川誼美氏

佐須虎捕太鼓は佐須地区の女性グループにより構成される創作和太鼓集団で、佐須地区の新しい伝統芸能として平成10年から村内を中心に活動を展開している。しかし、震災後の計画的

避難を受け活動を無期限休止となっていた。しかし飯舘村商工会議所や村長が、「こうゆうときだからこそ継続してほしい」と佐須虎捕太鼓会長の菅野稔男氏に持ちかけたことから再開することとなった。

震災後、全国からオファーがあるが避難生活と仕事、子育てと過労が続いている状態だという。避難後の練習は飯野町の体育館を借りるなどして対応しているが練習時間はほとんど取れていない。そのため依頼を断ることも多いという。子育て中のお母さんたちで構成される佐須虎捕太鼓は、活動継続をするだけでも相当な負担であるが、飯舘の状況と全国の支援に対する感謝の気持ちを太鼓の響きと共に伝えている。

銀座文祥堂ホールでは『被災地復興応援・世界遺産認定記念　守ろう！飯舘村「佐須虎捕太鼓」、よみがえれ！トキ　佐渡「文弥人形」上演会』が13時から17時まで開催された。当日は首都高速の渋滞と大雨により太鼓搬入に時間がかかったこともあって、到着後すぐの披露となってしまったが、堂々たる和太鼓披露は会場内の観客の胸を打つものとであった。受付ロビーでは、10月末までの村内情勢を時系列にまとめた資料を展示しながら、村民が都内市民に対し、村と避難の実情を伝えた。上演会終了後は、佐渡の文弥人形の方々と安穏市メンバーの方々との懇親会が催され、各地の民謡や踊りの披露などと歌あり踊りありの大宴会となった。

③築地本願寺での飯舘村『佐須虎捕太鼓』上演　（１１月２０日〈日〉）

東京２日目は、築地本願寺にて虎捕太鼓の上演を2度行った。安穏朝市の来客やNHKなどのTV局また、新聞社など市民とメディアが殺到した。上演にあたり佐須虎捕太鼓代表菅野稔男氏が佐須虎捕太鼓の現状と菅野氏の熱い思い、そして安穏朝市の方々への感謝の言葉を述べられた。安穏朝市のアフリカの民族打楽器を持参した佐藤氏と共演した曲を披露されるなど、安穏朝市の方々と佐須の方々、そして都民とが一体となったリズムが響く築地の朝となった。

写真3-6　安穏朝市での佐須虎捕太鼓披露の様子

避難により一時解散した「佐須虎捕太鼓」の復活は、避難生活を送る佐須の人々にとってとても重要な意義をもっていることがわかった。参加した佐須の方は、「こんな時だからこそ伝統芸能が地元の人々に力を与えてくれる。」と涙をうかべながら演奏を見守っていた。太鼓の鼓動を感じながら、幼少期から過ごした村での思い出が鮮やかに甦ったという。「このまま泣いていちゃいけない、自分の足でしっかりと前を歩いて行かなくちゃ」、そのような気持ちにさせてくれた演奏であった。伝統芸能はその地に生きる人たちの歴史と証そのものである。全国で薄れ消えゆこうとしている中で、改めてその価値と力を知ることが出来た。

朝市にも佐須のブースを出展し、震災前に加工が終わった佐須の味噌と避難後宮城県で農地を借り収穫した米を販売した。村は高い放射能汚染があるため震災後仕込みが出来ず、佐須地区で加工された最後の味噌となった。

佐須で味噌作りをしている菅野栄子氏は、このような形で佐須の味噌本来の味はなくなってしまうことに無念さを隠せないが、パルシステムとの協力を経て佐須の味噌を種味噌とし東京で新たな佐須味噌づくりを展開しようと励んでいる。

「佐須の味、佐須の文化が東京で生き続けてくれれば私たちの希望となる。」と都民に訴えかけながら味噌を丁寧に販売していた(**写真3-7**)。

写真3-7　市で都民と話す菅野栄子氏

朝市ではわら細工を体験できるコーナーが設置された。「わら細工を通じてメディアでは取り上げなれない飯舘村の風土と現状を多くの都民に伝えたい」と、佐須の菅野宗夫氏の希望から実現した(**写真3-8**)。菅野氏は飯舘村がこのまま世間から忘れ去られてしまい、政府や東電から水面下で蔑ろにされてしまうことを懸念している。

お話を聞いた20代の男性は、「これまでの村づくりや避難生活など住民の生の声から聴く実情は、驚きと想像を超えるものだった。メディアの情報ではほとんどわからないということをあらためて実感したし、これからの電力や自分の身の振り方を考えていきたい。」と真摯に受け止めていた。

写真3-8　朝市でわら細工を体験できるコーナー

朝市終了後、菅野氏は被災地の正確な情報が都心や全国に全然伝わっていないことに失望感を隠せないと同時に、今回のような村民自らが情報を発信していく取り組みを使命のように感じているようだった。菅野さんにとって一番衝撃的だった出来事は横浜からいらした方との会話だ。「ここだけの話、実は原発のおかげでいっぱいお金貰えたんでしょ？」という質問に対して言葉も出なかったという。外部への情報発信の重要性と難しさを感じた瞬間であった。

この銀座文祥堂・安穏朝市の上演会は佐須住民の心を温かく満たしてくれるものであった。「これまでの地域の活動によってできた人とのつながりが、このような形で支えてくれたことに本当に感動している。このご恩は何かしらの形で返していきたいし、人とのつながりをより大事にしていきたいと思う。」という区長の言葉で別れを迎えた。

④佐須元気集会（１月２９日）

第2回目となる佐須地区の集会は、佐須住民が多く避難している伊達市の公民館で開催された。30名程の住民が集まり、70代以降の高齢者が大半を占めていた。前区長の菅野永徳氏が企画し、区長をはじめ地区の有志で実行した。佐須地区は高齢者が多く避難後の生活習慣病が悪化していることから、外に出て馴染みの人たちとお茶を飲めないかというところから始まった。

集会は役場職員による健康診断と生活習慣病を防ぐ予防講座、避難生活の注意事項を説明した後、お茶会となった。お昼には区長さんが朝から仕込んだそばを皆でごちそうになった。

元気集会を期に今後公民館は無償で貸してくれることになり、定期的に集会を開くことを目標としている。より若い世代も参加しやすいようにするために議論を重ね、皆で村に帰る日まで元気に乗り越えようという集落の取り組みが始まったといえる。

3.4. 福大祭つながりプログラムの実施

(1)概要（遠藤章弘）

2011 年 10 月 29 日、30 日に行われた福島大学の学園祭（以下、「福大祭」）にて C プロジェクトはブースを出店した。地域に開かれたイベントとしての性質を持つ学園祭の特徴を活かし、震災により引き起こされている地域課題に対して少しでも学生が役に立てることがあるのではないかと考えたためである。

そこで C プロジェクトは、大学周辺の方々をはじめ福島で生活する住民がひと時でも休める場、情報交換ができる場をつくろうとブース出店の計画を立てた。その具体的な目的は三つある。第 1 に震災に端を発するストレスの軽減である。飯舘村の方々をはじめ、避難を余儀なくされる、あるいは自主的に避難した住民の方々は既存のコミュニティや相隣関係から引き離されてしまったという場合が少なくない。特に高齢者は活動範囲も狭くなってしまう傾向にあるため、仮設住宅や間借りしているアパートに閉じこもりがちになり、場合によっては健康障害も引き起こし兼ねない。それに震災による心の傷や避難先でのストレス等が蓄積している現状もあるため、外出して人が集まるところに足を運んでもらい、人と顔を合わせるといった行為が重要だと考えた。

また、住民が集まることで情報の交換もできる。第 2 は情報共有の場の必要性である。震災後、政府や場合によっては住民に身近な行政機関等の公的な機関、またはマスコミ等の発する情報は大なり小なりその信憑性が問われている。特に、このことは避難生活をしている住民にとっては大きな問題で、正しい情報を得ることが非常に重要な意味を持つ。また、情報の信憑性もさることながら、自分の地域の詳細な情報から身近な人間関係の情報を得ることも難しくなっている。しかし、仮設所や借り上げ住宅では知り合いが集まって話ができる緩い空間がなく、情報の交換ができない現状もある。したがって、避難生活を送る住民をはじめ、誰でも気軽に立ち寄れる場を設けることが重要だと考えた。

第 3 に、若い世代が集まれる場所の提供である。避難状況の聞き取り調査では、集会に集まる住民には高齢者が多かった。若い世代でも気軽に足を運べる場を用意する必要があると考えた。

以上の目的から、私たち C プロジェクトは福大祭に参加しようと考えた。C プロジェクトは、飯舘村の自家焙煎コーヒー店「極久里」に協力を得て実現した喫茶店を出店、そこで行った住民アンケート（愚痴アンケート）、飯舘村の写真展示、キッズスペースの確保、ステージ企画等の企画を行った。キッズスペースの確保については、大学際実行委員と福島大学災害ボランティアセンター（以下「サイボラ」）の二つの組織と相談しながら地域の住民に足を運んでもらえるような場を設置しようということで実施した企画である。なお、この企画に加え、福大祭がより開かれたものになるようにとサイボラは足湯スペースを設置している。

以下、本章では福大祭での C プロジェクトの活動の詳細について報告する。

(2)アグリコーヒーの販売（武田悠）

避難生活のなかで顔が見えにくくなった地域の関係、情報交換する機会をどうすれば増やすことができるのか、私たちは飯舘村の方々の憩いの場づくりとして「極久里コーヒー」を提供することを

決めた。「極久里」は飯舘村にある自家焙煎コーヒー店で、村民だけでなく福島市内にも人気が高く人々の憩いの場となっている。震災後の計画的避難に伴い閉店していたが、7 月 1 日に福島市に移転オープンした。

極久里コーヒー以外にも、飯舘村から移転オープンを果たしたお店はいくつか見られる。手打ちうどんの「ゑびす庵」や美容室などがある。村のぬくもりを感じていただき、村でのよき思い出や楽しみを振り返ってもらうことで、避難生活に生きがいやハリが出る何かを見出すきっかけにもなるのではないかと考えた。

コーヒー豆は「極久里」で扱っているものを購入させていただき、コーヒーメーカーについては市澤さんのご厚意で二日間お借りすることができた。その他にも出店にあたり必要なもの、その調達方法等を教えていただいた。

販売するにあたり、店主である市澤さんに淹れ方や出し方を教えてもらった。市澤さんは慣れた様子で教えてくれ、出前形式の販売の経験は豊富であるようだと感じた。

店名とコーヒーの写真の入った大きな看板も快く貸してくれた。福大祭当日は、店名に反応する客も少なくなく、福島市内でも知名度が上がっているのだと感じた。また、コーヒーがおいしかったことから店名を確認する客もおり、少しでも多くの人に「極久里」を知ってもらう機会になったと考えられる。

店頭には、お借りした看板と並べて飯舘村や佐須地区の写真も展示した。それらに注目する客もおり、コーヒーを楽しむことにとどまらず、飯舘村から避難した住民が、どのような豊かな暮らしを営んできたのかを知ってもらい、現在置かれてしまっている状況・課題について把握してもらう機会になれたらと思う。

写真 3-9 ブース出店にあたりコーヒーの淹れ方・出し方を教わるメンバーと市澤さん
（福島市内に仮移転した自家焙煎コーヒー店「極久里」にて）

(3) ステージ企画 ～被災地へのメッセージ～（木村義彦）

福島大学生や大学祭に来て下さった市民の皆さまから、被災地の方々へ思い思いのメッセージカードを作成していただき、福島県や星などが書かれた四つのボードを埋めていく、参加型ステージ企画を催した（**写真 3-10、3-11**）。

写真 3-10　ステージ企画参加者のメッセージカードを集めたボード(1)

写真 3-11　ステージ企画参加者のメッセージカードを集めたボード(2)

当初は飯舘村の方々への応援の言葉をいただこうと考えたが、飯舘村だけが被災されたわけでもなく、ここに集まる学生たちや福島県民、遠くから福島を見守る方々と多くの人々が震災と被ばくの当事者であることを忘れてはならない。また聞き取り調査などで会う多くの飯舘村民が、自分達

のことではなく津波で家族や友人を亡くした沿岸地域の人々、風評被害に苦しむ会津地方の人々、地震の被害が大きかった中通りの人々を気遣い避難生活をおくっていることが、被災地へのメッセージというコンセプトになった大きな理由である。県内においても最も高く避難も遅れた飯舘村だが、「辛いのは自分たちだけではない、人に気遣い、このようなときだからこそ人への感謝と村での生き方を誇りに思う」、そのような飯舘村の「までい」な精神をどうしても取り入れたかった。そのためメッセージには、家族や友人、大切な人、自分自身へなどと、日々なかなか口にはできない想いなど、参加者一人ひとりの思いがあふれている(**写真 3-12**)。

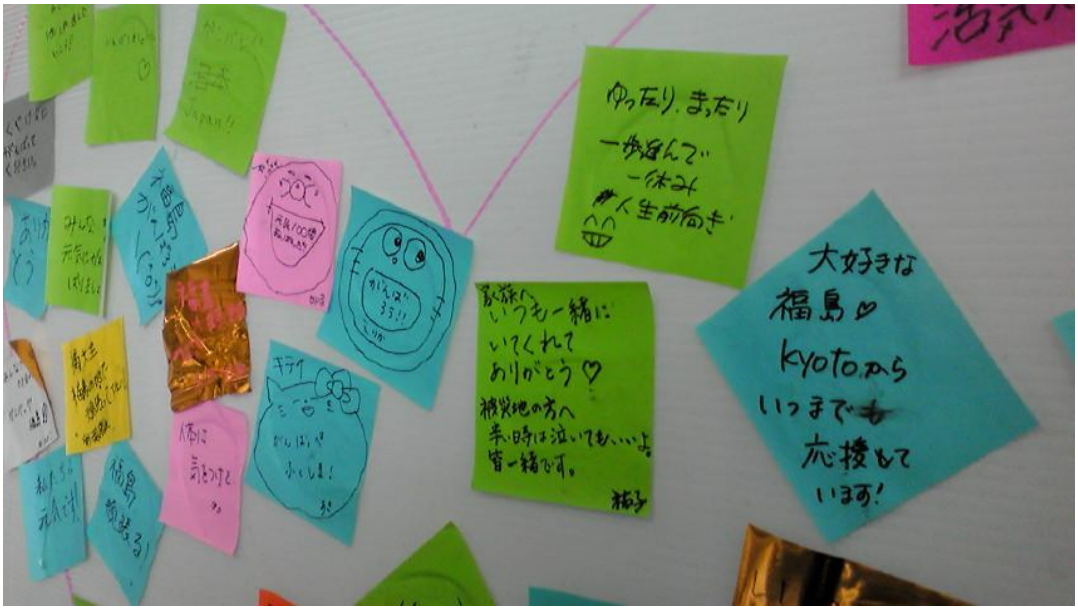

写真 3-12　ステージ企画参加者のメッセージカードを集めたボード(3)

(4)飯舘村写真展示（野田祥子）

大学 S 棟 1 階の教室に飯舘村佐須地区の写真を見ることができるサロンを設置した。同じ教室内では学生サークル「書道研究会」が作品を展示している。「書道研究会」と教室を分け合うことが決まった際、お互い協力してできることはないかと話し合いを行った。そこで、本来二つのグループが教室を分け合う場合、しきりでそれぞれのブースを区別することが多いのであるが、今回はしきりを設けず来場者が両方の展示物を見ることができるようにした。また、書道研究会には当初の企画に加え、震災を受けて感じたこと、メッセージ等をテーマにした作品の作成、展示をお願いして、快諾していただいた。

このようにして二つのグループの企画に関係性を持たせた。書道の作品を見に来た来場者には写真に収められた飯舘村佐須地区の文化の豊かさや地域づくりにとりくんでいた姿を通して震災の現状を考えてもらう機会を提供し、反対に佐須地区の写真を見に来た来場者へは書道の作品も楽しんでもらえるような、そのようなイベント空間を目指した。

C プロジェクトのブースについては、来場者に飯舘村佐須地区について知ってもらうべく、集落で 2009 年からとりくんでいた「までいな休日」というグリーン・ツーリズム型の行事の様子を映した写真

等をコルクボードに貼り付け、村の情報を紹介している。ここでは特に、飯舘村の地勢や産業、飯舘牛などの特産品、虎捕太鼓といった伝統文化、「ぐちカフェ」でもご協力いただいている自家焙煎コーヒー店「極久里」についての情報を掲載した。また、喫茶スペースを設け、これらの展示物をゆっくり鑑賞、閲覧できるようになっている。これは飯舘村の方々を含め来場者にとっての憩いのスペースとなること、飯舘村の方々どうし、飯舘村の方々と学生やその他の来場者とが情報を交換できるような交流スペースとなることを意図している。

当日は福島大学に限らず、県内の他大学からも学生が訪れていた。高齢者を中心とした一般客も訪れており、銘々に鑑賞や休憩をしていた。主に書道作品を目当てに来場した人が多かったが、そのなかの大部分の人々が飯舘村の情報に注目しているようであった。会話からも、原発事故の影響を大きく受けた飯舘村と避難生活を余儀なくされた村民の現況について心配し、気にかけている様子が見受けられた。また、喫茶スペースを利用していた人には愚痴アンケートにも回答していただいた。3 月 11 日の震災以降、それぞれにストレスや不安を抱えてきた人たちにとって、リラックスして気持ちを整理する機会になり得ていたら幸いである。

(5) キッズコーナー（今野成美）

キッズコーナーは福大祭に足を運んでくださった方々が休憩、交流するための場として設けた。屋外販売していた極久里のコーヒーを飲んだり、愚痴アンケートに協力してもらったりするための場でもあった。ポップコーンを配布したり、自由に利用できる数少ない休憩場所ということもあり、沢山の人で賑わっていた。キッズコーナーは、C プロジェクトのメンバーだけでなく、ボランティアの他大学の学生やサイボラのメンバーとも協力し合いながら実施した（**写真 3-13～写真 3-18**）。

ここでは、子どもたちが自由に遊べるように玩具などを準備し、一緒に遊ぶかたちで子どもたちと学生が交流した。子ども同士が声を掛け合ったり、おもちゃを譲り合ったりする場面も見られた。思い切り遊ぶことがなかなかできない環境の中で、子どもたちが元気に遊ぶ様子を見ることができて、このような場を提供できて良かったと感じた。

写真 3-13　キッズコーナーの様子(1)

写真 3-14　キッズコーナーの様子(2)

写真 3-15　キッズコーナーの様子(3)

写真 3-16　キッズコーナーの様子(4)

写真 3-17　キッズコーナーの様子(5)

写真 3-18　キッズコーナーの様子(6)

(6) 愚痴アンケート

福大祭つながりプログラムでは、より広く被災者の声を集めるため、参加者に対して「ぐちアンケート」というものを実施した。なぜ、このようなアンケートを実施することにしたのか。被災者の中には、震災後、様々な悩みや不安を抱え、日々ストレスを感じながら生活している方が多いことと思われる。しかし、これまでに、そのような思いを吐き出す機会はあまりなかったのではないか。また、私たちメンバーにとっても、これまでテレビや新聞などのメディアを通じて被災者の声を聞くことはあったが、被災者のそのままの声を直接聞くということは非常に意義のあることだと感じた。そして、これらの声を聞くことで、今被災された方々に対して、これから何をしなければならないのか、何が本当に

必要であるのかを考えることに繋がるのではないだろうか。そこで、被災された住民の方々の声を「愚痴」というかたちで聞くことで、被災者の本音を吐き出してもらうことにしたのである。

本アンケートでは、合計 10 名の方に回答をいただくことができた。アンケートに設けた項目とその設定理由は以下のとおりであり、これらの項目について、思うところをありのままに書いていただいた。

・現在の住まい
・今の生活で困っていること、不満に感じること
・これからの生活について不安に感じること
・自治体や政府に対する要望
・自由記入欄

以下に、10 名の方のアンケートの回答内容を紹介する（原文ママ。省略されている項目は未記入であった部分である。）。

①現在の住まい・・・三春町

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

特に、不満に感じることはありませんが、震災後に三春町の方から緊急時に服用するようにと、ヨード剤をいきなり渡されて、不安に思いました。詳しい説明もなしに服用するのはちょっと・・・。副作用があるのではと考えてしまいました。

☆これからの生活について不安に感じること

やはり、仕事にちゃんと就けるのか、が気になります。県内では、仕事がないのではと感じてしまいます。

☆自治体や政府に対する要望

とりあえず、除染を望みます。福島を忘れさることがないように、真摯な対応を。

☆自由記入欄

私の住む三春町まで、避難地域となることはなかったのですが、福島がこんなに有名になり、マイナスイメージがどこまでついてまわるかが気になります。とりあえず、仕事がなくなって生きがいをなくしている人のために、早急な支援を求めます。福島が元気になるには、やはり福島人が働かなくては！国は原発を推進した責任を取る意味でも、しっかりと賠償をするのが「誠意」だと思います。

②現在の住まい・・・福島市

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

お金がないこと

部屋が狭いこと

☆これからの生活について不安に感じること

仕事がくるか

☆自由記入欄

ジュースごちそうさまでした。

③現在の住まい・・・福島市金谷川

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

放射線の被害の話をされるのが嫌です。

☆これからの生活について不安に感じること

実家が警戒区域内なので、再び住めるのかどうか不安。

☆自由記入欄

早く実家に帰りたいです。

④現在の住まい・・・山形市

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

東北の中で被災をまぬがれた県に住んでおり、TVの中の避難された方を考えるととても恵まれた生活をさせてもらっていると感じます。

☆これからの生活について不安に感じること

やはり放射線については若干気になります・・・

☆自治体や政府に対する要望

実は山形で公務員をしております。被災県ではないということで、福島や宮城では受けられたサービスが、住民票をうつしたことによって避難された方が受けられないという現状もあります。もう少し自治体同士が連携して仕事ができないのかなーとは思います。下っぱの意見でした（笑）

⑤現在の住まい・・・福島市

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

自分のアパートの近くに多くの生け垣があるので、そこがホットスポットでないか不安。かといって、自分で線量計を自分で入手するにはお金がかかるのでできないこと。

☆これからの生活について不安に感じること

福島県内中を除染してほしい。方法を教えてくれれば、できる範囲で自分たちでもやるので、方法を紹介してくれないと微量といえども不安。

☆自治体や政府に対する要望

国会は、地震が発生してから7ヵ月予算もあまりとおさず、いちいち政争の具としていて、はっきり言って国会議員がいらない。県議会、市町村で必要に応じて請求してそれを通してくれるだけでいい。極端な話だが連邦制にでもしてほしい。いちいち国の許可が必要なところにスピードの遅れが出ている。

☆自由記入欄

国会中継を見ていると、いちいち自分の政党の維持のため地震からネタを引っぱり出してきてはぶちぶちぐたぐたやっているので、必要な部分（除染とか）は県、市町村で実行して、後から国に請求しちゃったほうがいい気がする。国会議員からしてみれば福島は関係ないみたいな考えを持っている人がいく人かいそうで不信感がある。一回破たんしないと気付かないかもしれないのかなとも思います。匿名だから言えるけど、東北で独立するとか言ったら協力したいぐらいです。

⑥現在の住まい・・・福島市金谷川

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

放射能の人体における影響（野菜などや、大気）

☆これからの生活について不安に感じること

私は女性なので、子どもを産むのに不安が大きいです。

☆自治体や政府に対する要望

対策を早く行ってほしい。

⑦現在の住まい・・・三春町

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

避難すべき時に、避難すべきだという指示が遅れていたことに憤りを感じます。

☆自治体や政府に対する要望

これから起こりうる問題を早期に予測して速やかな対応を心掛けていただきたい。

⑧現在の住まい・・・不明

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

風評被害

☆これからの生活について不安に感じること

風評被害によって、福島がかくりされていないか。

原子力発電が今後もあるのか。

☆自治体や政府に対する要望

福島に足を運んで、何よりも今の実体を知って欲しいです。

原子力発電を日本に造らず、南鳥島や沖ノ鳥島に置いて欲しいです。

⑨現在の住まい・・・不明

☆これからの生活について不安に感じること

お金。日本は、赤字すぎることかな。

☆自治体や政府に対する要望

福島を・・・。原爆をなんとかしてほしいデス。

☆自由記入欄

福島をきらいにならないでほしい。

福島がわるいことしたわけじゃないのに・・・。

⑩現在の住まい・・・郡山市

☆今の生活で困っていること、不満に感じること

郡山市は、放射能の値がまだ高いので、早く除染をしてほしいですね。

☆これからの生活について不安に感じること

これから、結婚をして、子供ができる人の将来のことを考えると、とても不安です。

☆自治体や政府に対する要望

福島県が、早く元の土地にもどり皆様が普通の生活に戻り、家族が心配なく安心して暮らせるようにしてほしいです。

これらの回答分かったこととして、大きく分けて以下の三つの被災者の声が挙げられると思う。

第 1 に、これは当然のことであるとは思うが、放射能・放射線への不安である。特に、除染の実施を求める声が多数寄せられている。その他、特に除染を放射線の人体への影響や、将来生まれてくる子どもへの影響を不安に想う声や、放射能の被害について話されるのが嫌だという声もあっ

た。

第 2 に、仕事に対する不安の声である。回答中には、「仕事が来るのか」「仕事にちゃんと就けるか、県内に仕事はないのではないか」といった声が寄せられている。また、お金がないことについての不安の声もあった。

第 3 に、政府および自治体の早急な対応を望む声や、政府や自治体の体制についての疑問の声である。なかでも、国（政府）の早急な対策を求める声は非常に多かった。中には自治体の対応や国会議員に対する不信感、被災自治体とそうでない自治体の間の連携の強化を求める声もあった。

回答からは、多種多様な悩みや意見が見受けられ、被災された方がもとのような生活を取り戻すには、まだまだ多くの時間がかかることが予想される。これらの声一つひとつにしっかりと耳を傾け、少しずつでも被災者の悩みや不安を解決していくことが必要であると思う。

4章　総括

4.1. まとめ（遠藤章弘）

以上、2 年目となる飯舘村佐須地区とのＣプロジェクトの活動は、観測史上最大の規模の地震と福島第一原子力発電所の事故による放射能漏れ事故により変更を余儀なくされた。最初に申し上げなければならないのは、地域の皆様にこうした非常事態が続いている中で私たちが活動することを受け入れてくださったことである。まずは、佐須地区の皆様に心から感謝申し上げます。地域のためにできることは本当に何なのかということが判断できない状態での活動であったが、地域の方々の声を聞き、そこから私たち学生ができることは何かということを考え、悩みながら行動にうつしていった。本当に地域のためになったのかということは私たちが判断することではないが、団体として今年度も活動を続けられたことは一つの成果であったと思う。

(1) 佐須地区の活動から感じたこと

しかし、実際に佐須地区の置かれている状況となると、やはり多くの課題が山積していることに気付かされた。第 1 に、大きな問題としては生活をどのように取り戻していけるのかということである。昨年度の活動においても感じていたことであるが、佐須地区の地域の方々の生活がいかに佐須地区の自然や大地といった何にも変えられない環境の中で成り立ってきたのかということを改めて感じた。このことに気付かされた時、原発事故は佐須地区の方々の生業を奪ってしまったその重さを感じずにはいられない。借り上げの賃貸や仮設所での生活がどれだけ佐須地区の方々にとっていたたまれないものであるのか、私たちは想像力をもって認識しなければいけない。聞き取り調査や佐須地区のイベントを通じてそうしたことを感じた。

さらに、その避難生活により大家族での生活が多かった世帯が核家族化してしまったことも同様に大きな課題である。昨日まで一緒にくらしていた家族が引き離されてくらさな

ければならないという状況を私たちは想像できるだろうか。こうした世帯数の増加が、佐須地区という地域の過疎化を早めることになってしまわないかということも予断を許さない課題だと考えられる。また、高齢化した方々が避難生活のなかで健康障害を心配する声も上がっていることがわかった。こうした喫緊の課題に対して、早急の対応が求められている。

他方で、こうした課題もありながら、佐須地区が培ってきたコミュニティ、あるいは絆の強さというものを感じずにはいられなかった。避難時期当初に佐須区長がメーリングリストを作成し、地区内の安否確認や連絡手段をつなぎとめたことや、「皆で元気に村に帰れるように乗り越えていきたい。」という村民の方々の声や想いから集会が開かれたこと等は、佐須地区が持つ地域の力そのものである。集会に集まる人、あるいはその主な対象者が高齢化の村民であったという声もあり、若い世代の集まりや、その相互が集まる機会をどのようにつくっていけるかということが課題としてあがっているのかとも感じられた。

また、地域の外との関係性についても、2009 年度からとりくみが始まった「までいの休日」により生まれた都市部の方々とつながりから、銀座文祥堂や築地本願寺でのイベントで虎捕り太鼓を披露する機会がつくられた。そこで佐須地区の方々は自らの想いや実状、そして地域の文化を伝え、参加者や都市部の住民と時間を共にした。そうした交流から様々な学習があったことを感じることができた。こうした活動を通して、人と人というレベルのつながりや交流というものを佐須地区のみなさまが大切にしていることを感じた。そしてそのつながりや交流のあり方は、「までい」という佐須地区、そして飯舘村が実践してきた地域のあり方そのものだと感じた。メディアが発信する情報への懐疑性に厳しい視線が集められるようになっている今日、こうした「までい」な交流やつながりの大切さについて、見つめ直すべきではないだろうか。

(2)福大 C プロジェクトの活動

一方で、私たち C プロジェクトのもう一つの活動は、こうした佐須地区の課題や村民の方々の声を聞きながら、福大祭でのイベントの実行を中心として行った。その一番の目的は避難生活を余儀なくされている飯舘村の方々をはじめ、震災に端を発する事態の被害者となった大学周辺地域や福島の人々が少しでも心を休められる場をつくりたかったことである。極久里のご協力による喫茶や飯舘村写真展の出店、参加型のステージ企画、愚痴アンケート、他団体が設置したキッズコーナーの協力、を行った。これらは地域に根付く大学として何ができるかということを考えての企画であったが、私たちはいろんな人が気軽に立ち寄れて、そこでそれぞれの何かを持って帰ってもらえればと考え実行した。

避難生活により人と閉じこもりがちになっている現状、放射能汚染による被曝や農業への影響等の情報が日々行き交い不安になって現状、外で遊ぶ機会を制限されてしまう子どもの現状、悩みや不安を話せないような雰囲気等、今日私たち福島でくらす人は様々な不安に駆られて日々を過ごしている。そうした状況で、地域に開かれた場所であるべき大学でこうしたイベントを実行したいと考えた。二日とも完売した大好評のアグリコーヒーを飲みながら一息つく方々の中には「極久里」を訪れた人も多く、また、仮設所での悩みや愚痴を話す光景も見られた。キッズコーナーでは楽しそ

うに遊ぶ子どもたちやそれを見守る親御さんの姿が見られた。参加型ステージ企画では、メッセージボードを埋め尽くす程のメッセージが集まり、そこには被災者を想う方や、友だちや家族へのメッセージを書く方、また自らの決意を書く方もおり、それらがメッセージボードに集まったのを見たとき、それが何か見る人にメッセージ性のあるものへと変わったように感じられた。愚痴アンケートでは、標本数は多く集まらなかったものの、その一枚いちまいには様々な声が寄せられた。それらを三つに大別したが、(1)放射能に対する不安、(2)仕事に対する不安、(3)政府や自治体に対するそれらの対応の要求やその行為に対する不信感、がやはり書かれていた。

これらの企画を通して、地域が感じている課題への認識から読み取れるのは未だに現状への不安が明確に残っていることである。C プロジェクトの企画により参加者が少しでも心を休め、さらになにか持って帰っていただけたのなら、うれしく思います。それとともに、今日私たちが置かれている現状を私たち学生はきちんと考え自分の未来を自分の意志でつくっていく、そんなふうになっていかなければならないと感じている。

4.2. 活動をとおして知ったこと・学んだこと

これまで紹介してきたように私たちの活動は 2011 年 3 月 11 日に端を発する災害と人害により当初の活動とは異なるものを強いられた。それを受けて、メンバーが置かれた状況、境遇は異なり、またそれぞれの考えやものの見方もやはり異なっていたと思う。そのような中でこうして報告書をまとめるところまで活動したことは、小さくても一つの成果だと考える。

しかし、活動が十分に行えなかった部分もあった。組織としてまとまって行動する企画を多く設けられなかった部分もあり、もう少し計画的に動けた機械もあったように思う。C プロジェクトとして飯舘村佐須地区の方々と面と向かってお話する機会も不十分であり、活動をもう少し大きく展開することができたのではないかと感じている。その少しの活動量の違いで、私たちが佐須地区、あるいは飯舘村への理解を深め、より確かな活動ができたのではないか、という思いに駆られてしまう部分もある。2 年間続いた事業も満期を迎えてしまいますが、こういった反省はメンバーそれぞれの今度に生かしていきたいと一同考えている。

最後に、メンバー一人ひとりの本年度の活動に対する思いを集めた。それがまとめに相当するという確固とした自信があると言い切れないかもしれないが、それを報告書のまとめの一つとさせていただいた。

今野成美

飯舘村の人々とこういったかたちで交流するようになるとは思っていなかったので、悲しく思った。しかし、飯舘村の頑張りを応援する人が大勢いるということは私にとっても嬉しいことだったし、それが飯舘村の人の心の支えになれたらいいと思う。

武田悠

去年の活動を通し、集落の協力体制や密なコミュニティ、住民の食や生活を形づくる農業、集落の活性化に向け「までいな休日」や農村レストランなど新たな取り組みに挑戦する住民をみてきた。地震をきっかけに、その集落が生活の場でなくなり、住民どうしが引き裂かれたとき、集落で築かれてきた活性化に向けた意気込みや取り組み、住民のコミュニティがリセットされてしまった気がして、元の生活を目標にしたとき、気が遠くなった。

住民の方と会ってこそ、何か支援ができると考えつつも、会っても何と声をかけたらいいのか分からないという複雑な気持ちを抱いてきた。募金活動や物産販売、写真展示などによって、飯舘村や佐須地区といった、生活を根こそぎ奪われた集落や住民のことを考える機会を、少しでも多くの人々に与えることができたなら嬉しく思う。一方で、去年から集落での生活をわずかながらでも見てきた自分たちだからこそ、住民の方から聞ける今の心境やふるさとへの想いがあったのではないかと思う。また、どう支援したらよいのか分からない、そもそも支援などできるのかという率直な想いを、住民の方に話す機会を設けたらよかったとも思う。

このように反省が多く残ったともいえるが、2 年間の活動を通し、震災の影響が今後長く続く状況下で、被災者の置かれた様々な状況をふまえ、より高い関心と問題意識をもって生活できるようになったことは大きな収穫である。去年から見てきた集落や住民を思い出し悲しむばかりでなく、状況の把握と自分のできることを考えることに努めていきたい。

野田祥子

放射能汚染、避難生活と、飯舘村の村民を始め多くの県民が様々な困難を抱えることになった。震災以前の生活の喪失やコミュニティの崩壊といった深刻な影響を与えており、ここからくるストレスの軽減や地域の人々と情報交換や交流の機会をつくることが活動の目的であった。福大祭は地域のイベントとして、学生のみならず周辺住民、避難生活をしている住民が楽しめる場であり、そのなかでも私たちの活動は来場者に憩いの場・交流の場を提供し、活力を与える機会となったといえる。しかし、こうした年に 1 度しか行われないイベントは人々がつながるきっかけを与えはするものの、必ずしも以後の継続的な交流に結び付くとは限らない。日常的に住民どうしが情報を交換したり、愚痴を言い合ったりできるような機会を設け、生活における不安を和らげる場の存在が求められているように思う。

阿部智明

私は、福大祭で椏久里さんのコーヒー販売を担当しましたが、予想以上に多くのお客様に来店していただき、需要に供給が追いつかなくなって大変な部分もありましたが、非常に嬉しく思いました。特に、「椏久里さんのコーヒーと聞いて買いに来たよ」というお客様が多く、飯舘村のことを心配してくださっている方々がたくさんいるのだということを実感することができました。また、大学近くの福島市松川町の仮設住宅から複数人のグループの方が来店され、隣の休憩スペースでコーヒーを片手にお互いに語り合っているのを見て、今回の企画が、被災された方々にとって少しでも役に

立てたのかなと思えました。

私は、これから就職のため福島を離れることになりますが、これからも福島のために、飯舘村のために、少しでもできることを探して実践できればと思っています。

遠藤章弘

2011年3月11日に起きた天災、その後に発生してしまった人災は、私たち福島で暮らす人だけではなく、国、そして世界規模で、私たち人間の営みを問い直す大きな機会になったと思います。当然ながら大学、そして学生のあり方も見直す必要があると思うのですが、とにかく今年度は「一体何をすることが正しいか」あるいは「何をしたいのか」という解けそうで解けない問いに向き合った一年でした。そして学生が主体となって活動するという狙いで始めた C プロジェクトは、まさに自分で考えて行動することが求められた活動で、自分がその狙いにちゃんと向き合えたのか、正直自信が持てない。大学生活の安全性に疑問を抱いたまま、半ばその気持ちをかき消そうとして、一年を送った。それでも「よくやった」と誉めてあげたい自分もいるのですが、完全に正当化できない自分がいます。

私は、今年の C プロジェクトの活動では報告書の編集や福大祭の企画等、いわゆる裏方でやる仕事が中心となりました。それが当時の自分ができる限界だと感じてのことでした。したがって、飯舘村の方々ときちんとお会いしてお話を聞かせていただく機会が少なく、報告書を編集する時になって気付かされることがとても多くて、複雑な気持ちでいます。ただ、その時の自分では、こうした心の声というのは村の方々にはお話してもらえなかったと、当然ながら思う。そういう意味では、他のプロジェクトメンバーと協力して行う活動の意義を感じてはおります。ただ、このことを改めて感じたことはせめてもの救いだと思う。

3 月 11 日に端を発するできごとは、「調査」を行う意味を、またそれが用いられてきた背景を、改めて私たち学生に、そして研究者に、行政の職員の方々をはじめ社会でくらす私たちに、これまでになくわかりやすく見せてくれたのではないかと思っています。調査という行為は、人々を動かす力を持っています。しかし、その力は権力的、暴力的な力を発揮します。私たちはそのことにもっと敏感にならなければいけないと思います。この一年間、飯舘村の方々が受けた傷は、なぜこんなに深いものにならなければいけなかったのでしょうか。こうしたことを考えると、それまでの自分たちの活動についても振り返ってみる必要があるとも思っています。しかし、ただ自分たちを責めるだけではなく、そうした考えをこれからの自分の行動にきちんと反映させることが大事だと思います。そうした気持ちの整理をしたいと思っています。

あの時も自分が行動は正しかったのか。せめてそうした問いを自分に言い聞かせてこれからも活動していきたいと思います。佐須地区の皆様、2年間本当にお世話になり、ありがとうございました。これらからもどうかよろしくお願いいたします。

木村義彦

2009年から佐須地区の皆様には色々とお世話になり、一緒になって地域づくりに励んでまいり

ました。私自身も福島市内で震災を経験しましたが、放射能汚染を知り飯舘村のみなさんが心配で仕方がありませんでした。原発事故後しばらくたって飯舘村役場の方から皆様の無事を聞いたときホッとしたと同時に、放射能の恐怖と混乱に苦しむ現状を知り何かしなくてはと思いました。今年度の C プロジェクトの活動は本当に何が地域のためになるのかわからなく、常に悩み続けながらの活動でしたが、これまでと同じようできる限り皆様とお会いし、直接言葉を交わしながらともに課題を挑戦していくことを貫き通せたことが何よりの成果であったと感じます。また、震災と計画的避難を経て佐須の皆様と活動できたことで、より人間の営みとは何か、コミュニティや伝統文化とは何かを痛感いたしました。

これまでの感謝と応援、これからも共に壁を乗り越えていこうという気持ちから、佐須地区の皆様に年賀状を送らせていただきました。私たち C プロジェクトメンバーは飯舘の大地と佐須の皆様に成長させていただきました。私たちの活動と成長が、少しでも皆様の生活や心を豊かにするものであれば幸いです。集落活性化事業は満期となりますが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

謝辞

今年度の活動は何かに追われているかのように、とにかくあっという間に終わってしまったという印象を持っています。報告書にも何度も書いておりますが、私たち学生も「何をすべきか」「何ができるか」という問に何回もぶつかりながらの活動でした。一方で、生まれ故郷からの避難を余儀なくされている状態の中で、私たち福大 C プロジェクトの活動を受け入れていただいた飯舘村佐須地区の方々に心より感謝申し上げます。活動の中で、これからのとりくみが地域にとって大切だということをお聞きいたしました。集落活性化事業の今年度で終わってしまいますが、これからもどうかよろしくお願いいたします。そして、2 年間の活動を通じて学習したことは私たちの一人ひとりの心に刻み込んでいきたいと一同感じております。

また、福大祭でご協力いただいた「極久里」の市澤さん、そしてステージ企画でご協力していただいたみちのくボンガーズのパチッコリンさん、そして 2 年間ご指導いただいた千葉悦子教授、その他福大 C プロジェクトの活動ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。最後に、福大 C プロジェクトにこうした貴重な体験をさせてくださった福島県地域振興課のみなさま、本当にありがとうございました。